

南インドにおける衣装と装身

高橋 貴

Abstract

In this paper, I discussed first the characteristics of traditional or formal costumes as Mundu, Vesti and Torthu which have been used by the Nair (Nayar) people in Kerala State of South India. Then I verified these clothes in ritualistic context. The living put on clothes without a stitch. The dead is also wrapped with one white cloth and tied by a few strings which are torn partially from it. No stitch means purification. In order to purify the body, some materials as sandalwood paste, turmeric powder and cowdung ash are attached on the forehead and chest. Purification is the common key word for these customs. On the other hand, they are afraid of pollution and evil eye. Main reason for taking bath and changing clothes everyday is to remove pollution. Durability for pollution is different according to the materials. Silk is not polluted for one week while cotton is only for one day. Many ornaments attached from early childhood have role to avoid harm by evil spirits. Purification and pollution are basic concepts to comprehend traditional clothes and body decoration among the Nair.

1. はじめに

インドでは周知のとおり成人女性の多くはサリーを着ている。サリーは今やインド女性の代表的ファッションとなった。産地もインド各地にあり、それぞれ特色あるサリーを生産している。インドの工芸品を紹介する冊子にはたいいていサリーについての記述があり、産地ごとにデザインや着方などを紹介している。調査報告書や研究書も少なからずある。ではインドの女性衣装はサリーによってだけ代表されるのであろうか。そんなことはない。各地には伝統衣装とか民族衣装といえるものが数多くある。たとえば西インドのスカート（ガーグラー）、ブラウス（チョーリー）、ヴェール（オールニー）、北インドのズボン（シャルワール）、上衣（カミーズ）などがあり、その他でも枚挙に暇がない。

そうしたも伝統衣装のひとつに南インド・ケーララ州のムンドゥ、ウェステイ、トットゥがある。これらは、男女が下半身に巻きつける腰布、上半身にまとう肩掛けである。いずれも無縫製の白い布である。本稿ではこれらの衣装と装身（具）をとりあげて特徴や儀礼的意味を論ずることとする。取り上げた理由は以下のとおりである。

①北インドとは異なる南インド独特の衣装であること。北インドと南インドは何かにつけて対比されるが、衣装についても同様である。たとえばパールフットやサーンチーの石彫女神像は胸を露出せず、頭にはヴェールをかぶっているものが多いのに対し、アジャンタやエローラでは胸を露出し、頭には何もかぶらない女神像が多い。これは北のアーリア文化と南のドラヴィダ文化の違いからきているという (Kumar 1998, p. 65)。南インドの独自性、地方性（南インドの中でもケーララ州と他の州ではまた違うが）にもっと注目しなければならない。

②伝統衣装はふだんでも年寄りたちが着ているが、若い人たちも公的な行事の場やヒन्दゥ寺院の儀礼に参加するときには正装として欠かせない。つまりこれらの衣装が伝統文化や行事との結びつきを強くもっていることを示している。いいかえれば人びとの身体観や美意識、社会関係、宗教儀礼、価値観を見る上で重要な指標になる。これに対してサリーは日常着としても晴れ着としても定着しているが、どちらかというとなファッション性が強く、伝統文化との結びつきは弱い。

③調査対象としたのはジャーティ名ナイル（ナヤール）である。ナイルはケーララ州のドミナント・カーストであり、バルボザやトメ・ピレスなどの著書を通じて、ヨーロッパ人に古くから知られていた。往時のナイルは王に仕える戦士として高い身分を与えられていた。現在は農民、官吏、教員などになっているが、依然として威厳を保っている。田畑を耕作する肌の黒いドラヴィダ系の人びとを監視するのは黒いこうもり傘を日除けに白いムンドゥをまとったナイルの男性なのである。衣装と装身からナイル文化の一端を検証する。

ナイルについては、これまでガフ、中根千恵などが現地調査を行い、詳細な研究書を上梓している。しかしいずれも夫婦が生計を共にしない母系的な大家族制度（あるいはその崩壊状況）についての研究であった。レヴィ=ストロースや清水昭俊らもこの特異な家族制度に注目し、論文でとりあげている。また最近ではタミール・ナードゥ州での世俗的ヒन्दゥ教研究で数々の成果をあげている C. J. ヒュラーやイギリスの女性人類学者メリング・ムーアも現地調査の上ナイルの家族制度についての研究を発表している。筆者もかつて母系制度は消滅しても家屋など母系的な継承が行われていることを論じた¹⁾。こうしたナイルの研究でいつも重視されたのは女性である。インドでは珍しく母系制度をもつジャーティであったため、ナイルの女性は今でもしっかりした顔つきをし、家庭内での地位を築いている。とくにかつてタラワディル・アマとよばれた一家の女主人である年長者にはその面影が強く残っている。服装と装身の点からそうした女性たちを把握したいというのがそもそもの出発点で

あった。ナイル以外のジャーティについては必要に応じて触れるにすぎない。各ジャーティはそれぞれ独自の習俗をもっており、ジャーティを横断する比較調査が必要であるが、それは筆者の手にあまる。

ここで報告するデータは、1985年ごろからケララ州中部のトリチュールやパルガット周辺において断続的に行ってきた調査で得られたものである。儀礼などではできるだけ参加して確認するように努めたが、中にはすでに行われていないものもある。しかし近過去のことなのか現在も行われているのか、かならずしも区別しなかった。というのは歴史的变化を探ることが目的ではなく、ヒンドゥーの意味的世界の中で衣服や装身がどのように存在しているのか探ることを目的としたからである。

ケララ州平野部の気候は年平均気温が27°C、一番寒い12～1月でも21°Cを越す。したがって一年をとおして温暖で、薄手の衣服あるいは上半身裸といったスタイルでじゅうぶん過ごすことができる。なお一番暑いのは4～5月、雨季は6～9月、乾季は12～2月である。現地語マラーラムはカタカナで表記した。

2. 子どもの衣服と装身

子ども、とくに生まれたばかりの子どもは肉体的にも霊的にも弱い存在で、社会関係も未形成である。いくつかの儀礼やしきたりは子どもに健やかな成長をもたらす、家族や親族との関係を構築するものといえる。

新生児は二重の意味で特別な存在である。第1は穢れプラの強い状態にある、という点である。そのため母親とともに15日間特定の部屋に隔離された。そこにはベッドはなくござが敷いてあり、子どもはその上に横たえられる。とくに服などは着せないで、寒ければ毛布をかける。第2は悪霊がつけいりやすい存在ということである。とくに昼とも夜とも区別できない夕方はその恐れが強い。そのためサンディヤ・ウリヤルとよばれる儀礼が行われた。これは、産婦の妹、産婦の姉の子など少女が行うもので、たとえばターメリックとライムを摺りおろして水に溶いたもの（赤）と、もみ殻を焼いて水に溶いたもの（黒）を皿に入れ、まわりに7つのランプを並べて火をつけ、これを子どもの頭の上でまわしながら祈願する。

15日が過ぎると、家族がヒンドゥー寺院から聖水をもらい受けてきて、母子はそれで身を浄める。これではじめて隔離から解放されることになる。寝室に移された乳児はおしめランゴッティをあてがわれ、ふつうは裸、寒いときには上衣を着てベビーベッドの上に寝かされる。おしめは木綿で、底辺が50cm、高さが23cmほどの三角形をしている。日本のおしめと比べるとかなり小さく、しかも薄い。ほんの申しわけていどにくるんである、といった感じである（写真1）。ベッドには長さ2～3 mの白い古布を敷き、頭の部分は折りたたんで高くしておく。ここに乳児を寝せ、腹に薄い布をかける。小便をしたら、おしめが小さいため

敷布を濡らすことがあり、そのときには敷布を少しずつずらしていく。

生後28日目にイルワタットゥ²⁾とよばれる重要な儀礼が行われる。これは耳に穴をあける儀礼で、4～50年前までは男女児ともに行っていたが、現在は女兒に対してのみ行っている。作業を行ったのはもともと金細工師（ジャーティ名はタタン）であった。かれは乳児の耳にバターを塗り、銅製の針ですばやく穴をあける。乳児は少し泣くだけで血もでない。この針は小さなものなので、耳飾りの中に入れておく。謝礼は、お供え用に用いた米、黒砂糖、バナナ、ココナツ、10ルピーていどである。しかしながら今では医者に穴をあけてもらうことが一般的になっている。



写真1 小さなおしめをして床に寝かされた乳児。腕輪、腰飾り、足首飾りをしている。

ひきつづいて父親（かつては母方のオジ）や祖父母から装身具一式が贈られる。耳飾りは、男児が環に玉をつけたカドゥカン、女兒が花のようにきれいな装飾をほどこしたカンマルで、どちらも金製である。指輪モディラムは金製のもの1個が与えられるが、誤って食べてしまう恐れがあるため指にははめない。腕輪にはウアラとカプがある。前者は細くて直系の大きいもの、後者は厚くて直径の小さいものをいい、どちらも金製のもの2個1組になっている。カリウアラというガラス製の腕輪もある。これは黒い色をしており、邪視を防ぐものとされる。腰飾りは、男児がひも状のヌーレ、女兒がチェーン状のアランニャルで、金製か銀製である。これとは別に黒い木綿でつくった腰ひもペールマニも与えられる。足首飾りはタラという。これは金、銀、銅、鉛、鉄の5種類を材料にした細いひもをより合わせてつくってある。やはり邪視除けの意味がある。首飾りチャンガラはもう少し成長してから贈られることが多いようである。これらの装身具はペールマニを除いてふだん身につけることはない。

イルワタットゥの日から男女児とも一種の化粧を始める。額の中央には丸い墨ポットゥをつけ、眼の下には墨で隈取りカンマシをする。墨は今では店から購入するが、かつては各自の家でつくっていた³⁾。男児は3才ごろにやめるが、女兒はそのまま続けることが多い。ただし成人した男でも誕生日にはこれをつける。ポットゥやカンマシをつけた乳児はじゅうぶんかわいらしくなっており、邪視が付け入りやすい。それを防ぐためには墨をちょっとつける。

生後6か月目の日は Cholヌーとよばれる。子どもはこの日からごはんを食べる。出産にともなう穢れはこの日でなくなるとされ、一家でヒンドゥー寺院に詣でてごはんを食べさせ

る儀礼を行うところもある。子どもには男女とも金の首飾りが贈られる。身内の人たちからは服、装身具、ベッドなどが贈られる。

生後1年目になって男女とも赤いふんどしコーナカムをつける。かつて、ナンプーディリ⁴⁾はエラ・コーナカムといわれるものをつけていた。これはバナナの葉を火であぶって柔らかくしたものである。低カーストの人びとにふれて穢れたような場合、すぐに取り替えることができた。子どもが歩くようになるとふんどしの上からムンドゥをつける。オナムの日⁵⁾には父親から初めて衣服が贈られる。これは比較的高価な、金線の入った絹製のムンドゥ（カセウ・ムンドゥという）が多い。寺院へ行くときや結婚式に出るときなど特別な場合に着用される（写真2）。

女子の場合、つぎの服装の変化は、現在でははっきりしなくなったが、かつては初潮前に行われる一種の結婚式を契機にしていた。これについては後述するが、年齢でいうと11か13歳の奇数年の吉日で、この日以降少女はムンドゥと、ふんどしに代わってオナラを着けるようになる。服装の上ではもう一人前とみなされることになる。

以上の例からもわかるように子どもは生まれたときから節目節目にさまざまな装身具が贈られる。しかしこれらは身につけることがほとんどなく、したがって装うことだけが目的とはいえない。むしろ一つは贈り手と受け手のあいだの親族としてのつながりを確認することにある。これはたとえば28日目の儀礼で名づけ儀礼が行われることに表れている。両親や祖父母は子どもに装身具をつけてからその左右の耳に名前を3回ずつささやく。長子の場合にはかつては母系の祖父母の名前をつけることが多かったのである。装身具のもう一つの役割は子どもを邪視や悪霊から守ることにある。そのため5つの金属をまぜた最強のパンチャ・ローハムや金銀など高級な金属、あるいは黒など色のついたものが使われる。

3. 女性の衣装と装身

ナイルの成人女性はつやのある長い髪をもち、いくつかの装身具と洗濯したばかりの真っ白な衣服をつけている。はでではないが、なかなか清潔感のある人びとである。では過去の



写真2 3歳の女兒。カセウ・ムンドゥを腰に巻き、装身具一式をつけている。自然にこんなポーズになった。

異邦人の眼にはどのように写っていたであろうか。たとえば15世紀のアラブ人はつぎのように書いている (A. S. Menon 1979, pp. 110~114)。

ナヤールの女性たちは腰布を巻くだけで、その他の部分は裸のままである。この点、男も女も王も変わりはない。これに対して、ブラフマンの女性は身体をおおう。ナヤールの男たちは女たちを装身具やきれいな布で飾り、人びとの集まりに連れて行ってみせびらかす。

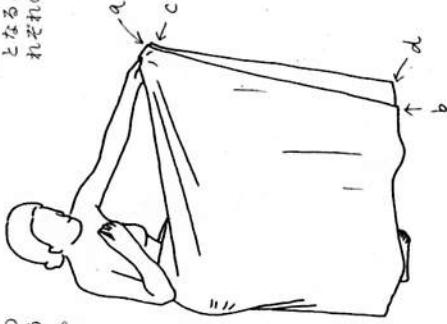
また、19世紀初めごろのナイルの女性について、ジェームス・フォーブスはかなり詳細に書いている。

女の衣服は男のそれとよく似ている。黒くて光沢のある髪を頭の上で結び、ココナツ油を塗り、ピャクダンやチャンパカを香水としている。耳は重い宝石をつけた耳飾りで肩に触れるぐらいまで垂れている。これが美人の条件である。耳の穴にはココナツの葉を丸く束ねたものをさしこみ、だんだん穴を大きくしていく。穴の直径が2インチほどになることもまれではない。穴の傷口が治ると、たくさんの耳飾りをつける。腰のまわりにはゆったりしたモスリンをつけ、胸は裸。これはマラバールの女性だけの特徴である。しかし、かの女らは金や銀のネックレスに、ヴェネチア産金貨などをつけて身を飾っている。重い腕輪もしている。また、銀の箱をぶらさげ、中にペーテルの実をいれている。肌は、芳香のある油を塗っているためすべすべとしている。

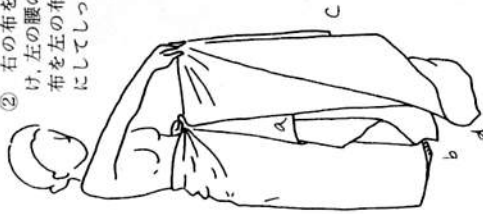
以上の記述にはナイルの女性の伝統的な姿がよく描写されている。補足を加えながらもう少し詳しくみることにしよう。まず、記述にはなかった下半身の下着オナラである (図1)。これは白い無地の縫い目のない一枚布で、長さ2.5~3 m、幅1 m余りのものである。手の先からひじまでの長さをモラムというが、オナラの長さは個人によって5~7モラムとまちまちである。「おれの女房のオナラは誰のものよりも長い」といって自慢するようにオナラは貞操観念と関係する。素材は薄くて柔らかい木綿が使われる。着方は一般にカッチャ式とよばれもので、一枚の長い布の一部を足の間に通し、背中のところできし込む。カッチャ式は、中央インドや南インドでのサリーの着方でもある。現在オナラを着用するのは中年以上の女性のようなのである。この場合ムンドウのときでもサリーのときでも着用する。しかし若い女性は寺院へ行くときなど特別な場合を除いて着ることは少ない。

オナラの上に腰布ムンドウをまとう。ムンドウは長さ3.5m、幅1.2m前後のもので、やはり1枚の縫い目のない綿布である。これは生なりか漂白したもので、縁に沿って赤や緑の線が1~2本つく。外出用のものは生地が上等になり、線は金や銀などはでになり、太くなる。この上等なタイプのムンドウがオナムのときに贈られるわけである。ムンドウの着方は、ま

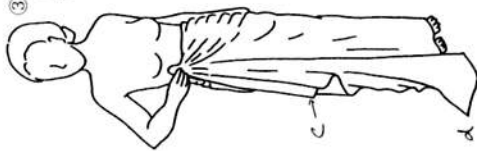
① 布端を前で合わせ、背が中心となるようにする。a～dはそれぞれの布端の角を表わす。



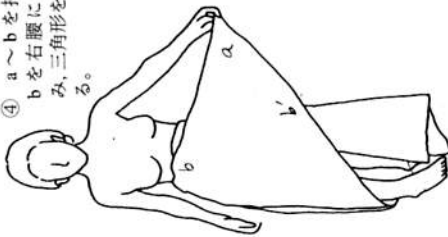
② 右の布を体に巻きつけ、左の腰の位置で右の布を左の布とよめるようにしてしっかりと止める。



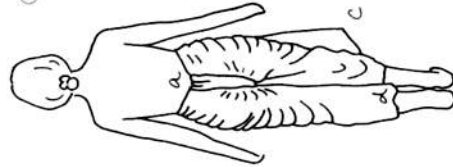
③ 左の布を体に巻きつけ、右の腰にはさまむ。



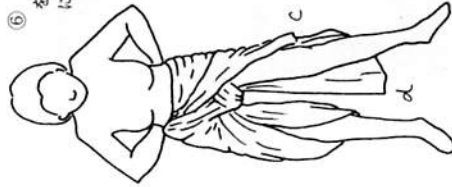
④ a～bを持ち、bを右腰にはさまみ、三角形をつくる。



⑦ cを上へかぶせてでき上り。



⑥ 股ぐりを通してaを後ろへまわし、腰にはさまみこむ。



⑤ b'の位置でタックをとり、a～b、b'の部分を襷状にする。

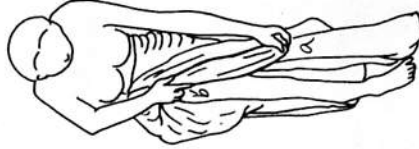


図1 オナラの着方



写真3 80歳になる老婆とその長男。老婆はブラウスとムンドゥを着ている。未亡人であるが、胸には金の首飾りをしている。耳たぶの穴が大きい。男性はムンドゥにシャツ。これが今の正装であり、外出着。



写真4 ブラーマンの女性。まだ学生でふだんはズボンなどをはいているが、家で祭りをするときにはウェスティ、ムンドゥの正装をする。

ず布を腰の後ろにまわし、その右端を左腰にあわせる。他の一端を右まわりに巻きつけていき、最後の端は若干折り返すようにして右腰にとめる。着るときのこつは、縦の文様の線をまっすぐにすること、裾が床面すれすれまできて足を隠すようにすること、布の右端の一部を長めにとって左腰の上から少し垂らすこと、などである（写真3）。

上半身は、フォーブスが指摘するようにかつては裸であったが、現在はブラジャーとブラウスをつける。これらはサリーを着るときにつけるものと同じである。昔の習慣にしたがって、老人の中にはブラジャーをつけない人もいる。ブラウスは丈の短い薄手のもので、身体にぴったりあわせて仕立てる。色はやはり白がふつうであるが、色つきのものを好む人もいる。

ブラジャーとブラウスの上に肩掛けウェスティをつける。オナラ、ムンドゥと同様これも一枚の縫い目のない綿布である。ムンドゥと同じ柄で対にして売られている。大きさは長さが2 m、幅が1 mほどである。着るときには、まず布を腰の後ろにまわし、前で両端を合わせる。左端を右腰にはさみ、左まわりに巻いて上半身をおおい、左肩から後ろに肩掛け風に長く垂らす（写真4）。ウェスティは胸おおいとしても使われる。着方はムンドゥのそれとよく似ており、これによって乳房の上部からひざぐらいまでがおおわれる。

ナイルの女性はふだんから身体を清浄にし、装うことを心がけている。朝は起きるとまず

池に入って沐浴クリーをする。このときに髪を洗い、新しい服に着替える。水から出るとゴマ油かココナツ油を体中に塗り、マッサージを行う。ある人の説明では女性は火曜と金曜、男性は水曜と土曜の2回行うものだという。マッサージは若さや健康を保つための秘訣とされる。これらの油は髪の毛にもつけられる。女性は髪を長く伸ばしており、沐浴後、髪をくしけずる姿はどこでも見られる光景である。髪に油をつけることは髪を柔らかくし、つやをだす効果があるとされる。身だしなみの最後はビャクダンを水とともにすりおろしてペースト状にしたチャンダナムを指につけて額に塗る。これは本来女性のつけるものではないという人もいるが、中年以上の人はよくつけている。

女性のあいだでもっと一般的なのはポットウである。これは、マリアマ女神をまつた寺院などからお下がりプラサーダとしてもらった赤い粉クンクナムやターメリックで、額に丸く塗る。最近は布製で（裏に糊がついている）、形もハート形、楕円形などさまざまなものを額に貼るようになった。まゆと眼の下まぶたは黒く彩って眼の美しさを強調する。

沐浴は夕方にも行われ、このときにも衣服を替える。汚れた衣服は、かつてはナイルのサブカーストであるウェルタダット・ナイルが洗濯した（今は出入りの洗濯人が洗う）。他の低ジャータに洗わせると穢れが移るので避けていた。ただし生理のときの衣服はマンナン⁶⁾が洗うしきたりであった。女性が3日間部屋にこもるあいだ、マンナンの妻が毎日来ては汚れた服を持って帰った。洗濯はふだん池で行うが、このときだけは川で行った。マンナンの妻はそもそも産婆であり、ナイルの家との関係は長期にわたって続き、結婚式などあらゆる機会に出席する権利を持っていた。

装身具に関しては、目に付くのがフォースも書いているように、耳のピアスの穴である。高齢の女性はたいてい大きな穴をあけている。穴を大きくするには炭か竹をさし込み、それをだんだん太くしてゆく。そこにはトグとよばれる大きくて重い耳飾りがぶら下っていた。しかし、そうした耳をもつ女性は高齢なため（未亡人になったという理由もある）、装身具を取り外しており、大きな穴だけがよく目立つ。

鼻飾りムクティは7～8才ぐらいから上の女性がつける。つける場所は左の鼻翼で、一種の魔よけと考えられている。この他に身につけるものは首飾り、腕輪、足首飾りなどである。材料は金からプラスチックまでさまざまである。

ここで結婚をきっかけに女性の服装がどのように変化するかみることにしたい。まず現在の状況であるが、ケーララでも他のインド諸地域と同様に未婚者、既婚者、未亡人という3つのステータスが女性を判断するための重要な指標となっている。未婚の若い女性は色の多いものを好んで着る。まず小学生はスカートにブラウスである。スカートの着用はふつう小学生でいどの幼少年期に限られる。なぜならば成人女性の場合、腹や臍を露出することは構わないのに対し、足首を出すことは一般に不謹慎ではずかしいことだとされており、まだ性的に未熟な少女にのみスカートの着用が許される。高校生や大学生はシャルワール・カミー

ズを着ることが多い。軽快なパンツ・スタイルで、長いマフラーをなびかせながら颯爽と歩く姿はケーララの田舎でもごくふつうの光景となっている(もっとも都会ではロング・スカートも多い)。

既婚者はスタイルの上ではっきりと区別される。インド人の女性は一般に髪を中央で分け、後ろに長く伸ばしているが、既婚者は髪の分け目の額部分に赤い粉クンクムを塗る。ただしこの習慣はもともとケーララのものではないので、やらない人も多い。もう一つ、既婚者はタリという短い金の首飾りをする。これは金の鎖の先にひし形よりのロケットを取り付けたもので、結婚に際して夫から贈られる。結婚式では、花婿と花嫁の間で花輪、サリー、指輪の贈与が行われる。サリーは金糸の入った豪華なシルク・サリーである。タリの贈与は式のハイライトの一つである。タリはふだんから身につけておけるが、夫が死んで未亡人になるとはずす。これは寺院に寄進するか、とっておいて錆をおして使う。子どもにやる場合でもそのままあげることはない。タリは夫の火葬のときに火の中に投げ入れることもある。

未亡人は身を装うことをしないため、ポットウをせず、装身具もはずす。服装はムンドゥとウェスティであるが、漂白したものに限り、生成りや色物は避ける。着方そのものには変化はない。

以上が現在のナイル女性の姿である。しかし20世紀の初めまでの状況はこれとはまったく異なっていた。一言でいうと結婚を契機にした服装の変化はなかったのである。その辺の事情をタリに例をとって述べてみよう。タリは、かつてはもう少し違った時期に贈られていた。C. J. フュラーによると、少女が初潮を迎える前にイナンガン⁷⁾とよばれる男性によって贈られる。タリを贈与されることによって少女は結婚しうる年代に入ったとされ、その意味で1回目の結婚式と解釈されている。しかし必ずしも実際に結婚するわけではなく、またタリも儀礼が終わると取り外してしまう。タリは性的成熟を象徴するものであっても、結婚を意味するものではないことになる。このことと関連してフュラーはタリがインドボダイジュの葉を表しているのではないかという。とするならばこの樹は多産を意味しており、タリの意味とよく結びつく。

タリをもらった女性はいつでも結婚することができた。しかし母系制で、しかも男女が結婚しても別居別世帯をするという珍しい制度をもっていたため、夫婦の結びつきはきわめてゆるいものであった。タラワドとよばれる母系大家族の中で力をもっていたのは年長者であるカルナヴァン(男)やタラワディル・アマ(女)であった。裏を返せば、経済的にも心理的にも夫のもつ意味は小さく、結婚によって女性の地位が変化するということがなかったのである。離婚や夫と死別した女性は再婚することも自由であった。したがってナイルの女性は未婚か既婚かの区別をする必要はなく、当然服装にもそうした違いは表れなかった。

4. 男性の衣装と装身

若い男性のあいだではズボン、シャツ、サンダルという近代的なスタイルが一般的であるが、年長者の場合はふだんでも伝統的な民族衣装を着ている人が多い。男性の伝統的な衣装は基本的に女性のそれとよく似ており、縫い目のない一枚布である腰布ムンドゥと肩掛けトットゥからなる。ふだん家にいるときなどは、上半身には何も着けずに裸でいる。またムンドゥを二つ折りにして裾を腰に差し込んでいることが多い。この方が涼しく、作業もしやすく、歩きやすいからである。雨の降っているときには裾を濡らさなくてもすむ。しかしこれは私的なスタイルであり、会合など人の集まる場所ではもちろん、ふだんでも客や年長者などに会うときには長く伸ばして威儀をただす。いわゆるヴェシティ型とよばれる着方である。ムンドゥには、一枚だけで使われるやや厚手のシングル・ムンドゥと、二枚重ねで使われる薄手のダブル・ムンドゥとがある。大きさは前者が長さ1.8m、幅1.2m、後者が長さ3.5m、幅1.2m前後である。前者がケーララでは古くから使われてきた。色は白が多く、女性のそのように色のついた線が入ることは少ない。着方は女性の場合と同じで、右まわりに巻きつけ、最後は右腰で留める。裾を地面すれすれまで下げることも同様である。

若い人々や低い階層の人たちのあいだでは柄のついた腰布ルンギを着ることが一般的になっている。その理由は派手できれいだし、汚れも目立ちにくい、といったことである。ルンギはそもそもムスリムが着る衣装とされており、ムンドゥと違って左腰に端がくるように着る。以前はムスリムと、それを象徴するルンギを着た人はナイルの家に入ることは許されなかったという。したがってブラーマンやナイルなど上層の人びとあるいは役人、教員などのインテリは今でもムンドゥしか着ないという人が多い。

下着は木綿製のふんどしコーナカムが伝統的なものである。コーナカムは縦90cm、幅20cmほどの1枚布である。つけるときには布を股のあいだに渡し、腰ひもから垂らして留める。しかし現在ではこうした下着をつけるのは老人のみで、一般にはパンツが利用されている。

下半身のムンドゥ、上半身のトットゥが男の日常着である。トットゥは肩掛けのことで、大きさは長さ1.3mから1.5m、幅が70cmほどである。これを縦長に折って左肩にかけるか、両肩にはおって前であわす。トットゥはこの他さまざまな使い方がされる。寒いときに肩にはおる、暑いときには扇子がわりにこれでおおぐ、日差しが強いときや雨が降っているときには頭にかぶる、頭にものを乗せて運ぶときのクッションとする、汗をふく、ものを運ぶ、風呂敷のように包む等々(写真5)。トットゥは男がいつでも身につけておき、必要に応じて使い分けすることができる便利な小道具である。

トットゥより生地が上等で、もっと長くしたものが外出着、正装である。ヒンドゥー寺院へ参拝に行くときにはこのスタイルが望ましい。しかし公的な場では白いシャツを着ることが一般的になっている。

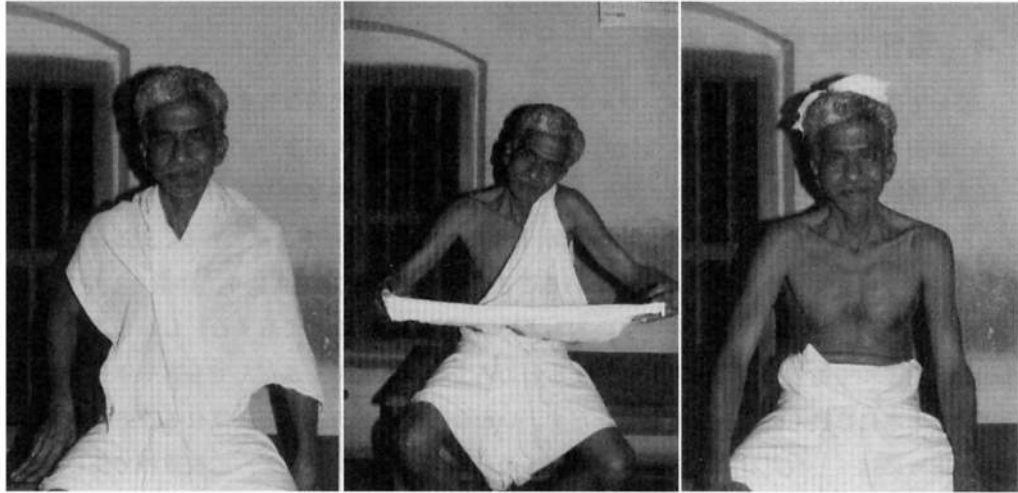


写真5 トットゥはさまざまな使われ方をする。左から肩掛け、ふろしき、頭上運搬。

ところでブラーマンの衣服はナイルと同様であるが、聖紐プーヌルをつける点異なる。この儀礼はウパナヤナムといい、ブラーマンの少年が13歳ごろになると一族を呼んで盛大に行われる。会場は庭先で日除けのよしずを張り、その下の地面は牛糞を塗ってたたきにし、米粉で吉祥文様を描く。父と子は指導者の指示をおおぎながら、招待者の前でホームの火に米や聖草を投げ込み、マントラを唱える。そして最後に白い木綿の輪を左肩から右脇腹にかけ、少年は晴れて一人前になる。

女性と同様、ナイルの男性も朝の沐浴後、ビヤクダンを身体に塗る。ビヤクダンは寺院からもらってくるかあるいは自分の家で木を摺りおろしてつくる。これを指につけ、額には丸いチャンダナ・ポットゥ、のど、胸、二の腕には一本線のチャンダナ・クリを描く。横の3本線はウアラ・クリという。これはカルキダガム月（7～8月）の1ヶ月間とくに女性がつけるものとされる。額に縦の3本線を描くゴビ・クリはタミル・ナードゥ州ではヴィシュヌ派を表すとされるが、ケーララ中部ではあまり見かけない。この他、牛糞を焼いてつくった聖なる灰バスマムも用いられる。バスマムはどこの家でもふだんから用意しておくべきもので、鉢や箱に入れておく。朝夕2回つけるが、朝は灰を水で溶いて横に3本線を描き、夕は水で溶かずにそのまま1本線を描く。つける場所は額、のど、胸、二の腕、ひじ、手首、背中などである。特殊なものとしてムクティ・チャンドゥというものもある。ムクティというのは8～9月ごろに生える草で、葉を採り手でもんででる黒い液汁を額につける。とくにカルキダガム月の最初の7日間はつけると幸いを招くとされる。これらのものをつける意味は「脳と心臓を冷やしてリフレッシュする」「身体からの浸出物を吸収し、汗が眼に入るのを防ぐ」「生命力の中心である額を守る」などと説明されるが、一般には身体を浄化するものと考えられている。

5. 衣装における浄性と穢れ

ケーララの衣装を考える場合、単に物理的な特徴だけでなく、浄性、穢れ、邪視、吉凶といった観念的な側面を抜きにすることはできない。これまでの記述と多少重複するが、まとめてみることにする。まず取り上げるのは無縫製という点である。縫製した衣服自体はリグ・ヴェーダの時代には知られており、北インドの寒い地域では古くから用いられていた。しかし南インドでは無縫製の薄い布をまとい、ときに裸で過ごす生活がふつうに行われてきた。一つは気候が暖かいという理由による。もう一つは無縫製が浄衣だからである。なぜそうなのかははっきりしないが、人びとはそのように認識し、説明する。いくつかの使用例をみればそれも納得できる。もっとも典型的なのはヒンドゥー寺院での祭司である。腰にムンドゥを巻き、上半身は聖紐を掛けるのみで裸である。こうした姿が聖所にもっともふさわしいとされる。祭司だけでなく、寺院助手や楽師も同様の姿である（ただし公的な寺院＝Devasome Boardに所属する寺院の職員は宗教者との立場上の違いを主張しているかのように白シャツを着る）。参詣に訪れる信者たちも同様で、男子の場合はムンドゥとトットゥが望ましい。今日ではズボン、シャツなど縫製したもの、皮製の靴やベルトを身につけて寺院に入る人もいるが、本来は望ましくない。女性の場合はムンドゥとウェスティ、サリーが許される。いずれも無縫製の1枚布だからである。浄衣という考え方は生者だけでなく死者にもあてはまる。遺体は、陰部にバナナの葉をあてがってから白い1枚の布チョートゥポダワで包む。これを三箇所ではばるが、ひもは包んだ布の端を切り裂いたもの（切り離さない）が用いられる。つまり死者の衣装も1枚布でできているということになる。ちなみに遺体は事情が許せば家の南側の敷地で火葬にするが、そのまきはマンゴーの木1本だけからつくる。だから旧家で



写真6 遺体は1枚の布で包まれ、マンゴーのまきの上で火葬される。

は敷地の一角にかならずマンゴーの木が数本植えられている（写真6）。

浄衣を着るときは沐浴して身体を浄めることが必要である。それには特定の材料が用いられる。ビャクダン、ターメリック、バスマムである。ビャクダンは英名サンダルウッド。ひじょうに高価で、神像や宗教用具をつくる材料になる。浄化儀礼にも不可欠で、それを摺りおろすための石チャナは家庭やヒンドゥー寺院の必需品である。たとえば寺院では本堂の脇に聖水をとるための井戸と神への食事を準備する台所があり、その一角に摺り石を台に固定している。祭司はここで儀礼をするたびにビャクダン・ペースト＝チャンダナムをつくり、自らの額、胸、二の腕などに塗る。儀礼が終ると、集まってきた信者にお下がりプラサーダとして与える。

ターメリックは衣装、身体浄化、宗教儀礼に多用される。新品の服をおろすときや、ブラーマンの少年が新しく聖紐を掛けるとき、ターメリックを少しつける。黄色が金を意味し、吉のサインとなる。ひもを手首に巻いてターメリックをつければ悪霊を近づけないための魔よけとなる。女性は沐浴後、身体に塗る。顔や手足に塗ってむだ毛をなくし、生えにくくもさせる。ターメリックは黄色であるが、身体に塗ると黒くなって健康色になるという。肌の白い病気に効き目があるともいう。出産や月経のときにも身体に塗る。第三の眼のある眉間には浄化の意味で塗る。また家庭祭祀などでは一つまみのターメリックで神を象徴させることもある。このようにターメリックはひじょうに重要な植物である。この延長上にあの黄色いカレーがある。

もう一つ重要なものがバスマムである。これは牛糞を焼いてつくった灰のことで、やはり儀礼に欠かせない。作り方は牛糞をボール状にして5～6日干し、円錐形に積み上げて初殻でおおう。火をつけて燃やし、さめたころに手につぶして粉にする。箕でごみをとり、きれいな水とまぜて天日干しにし、乾燥した灰を土器や木箱にしまっておく。朝夕、沐浴が終るとこれを額や胸につけ、身体を浄化する。水で溶いて身体に塗れば皮膚病にならないともいわれている。

ところで淨いということは穢れを前提にする。穢れには3つの種類がある。1つはアシュツダムとよばれるもので、飲食、大小便、人との接触など日常生活することによって必然的に生じる。たとえば木綿の服は一日で穢れ、絹の服は一週間ほど着なければ穢れない。したがって木綿の服は毎日変えることが望ましいし、寺院へ行くときは洗濯して清浄にしたものを着なければならない。それに対し絹の服はたとえ少々汚れていても穢れてはおらず、祭司でも数日間着た服でプージャーに参加することができる（ただし絹は高価なので一般には木綿を用いる）。この種の穢れは手を洗うか沐浴などして服を着替えば消滅する⁸⁾。したがって人間に本質的に付随する穢れではない。

2つめの穢れはプラとよばれる。出産と死が起こると、当事者である母子や遺族が穢れた状態になる。この穢れは沐浴しても消滅しない。他者に穢れを移さないためには一定期間隔

離するしかない。その期間はジャーティによって異なる。ナイルの場合は出産も死も15日間である。ブラーマンはこれより短い、ナイルより低い階層のジャーティは一般的にもっと長い。生と死は衣服や装身具を変化させる。生まれた子どもは親族からさまざまな装身具が贈られる。他方、夫の死を迎えた女性は装身具をはずし、衣装も白いシンプルなものを着用する。初潮や月経の穢れはブラといわないが、同じような特徴をもっている。

3つめはカースト制度に関わる社会構造的な穢れである。穢れの度合いは生まれによって決定される。沐浴によっても隔離によっても解消されない。この制度は公的に撤廃されたが、地方では今でも職業や婚姻と関係して重要な意味をもっている⁹⁾。

劣位な者が優位な者へ作用を及ぼすという点で、穢れと類似しているのが邪視である。邪視とは美しいもの、立派なものに対する他者の妬みで、それが災いをもたらすとの考えである。インドのみならず、中近東から北アフリカまで広く見られる。ケーララではカンヌタットウガといい、人びとがたえず気にしているものの一つである。邪視を避けるためにいろいろ工夫がこらされる。具体的によく見かけるのは新築の家の前にぶら下げられた人形である。猿や龍のかたちをしたものもある。しかしもっとも典型的なのはつばを逆さにして目鼻を描いたものである。そのまま軒にぶら下げたり、あるいは手足をつけてちょうどかかしのよう立っているものもある。建築中の家の前やよく実った畑の横などにも置かれる。よく動いて作業能率のよい織り機にはとうがらしをぶら下げる。人間の場合は子どもが邪視につけ入れられやすい。かわいいと思われることは避けなければならない。そこで男の子は右頬、女の子は左頬に墨をちょっと塗る。これで醜くなったというわけである。ポットウやカンマシなど装身に使われる材料がつける位置を少しずらすことによって反対の意味が変わる。装身具が同じような役割をはたすことはすでに述べた。では邪視が災いをもたらしたときはどうするか。たとえば子どもが病気になったとき、母親はとうがらしと塩を混ぜて子どもの前で振り、火にくべ、邪視を追い払う。こうして他人の妬みをかうほどに身体をむやみに美しく装ったり飾ったり誇ったりすることは避けられる。もっとも自分が美しすぎるから邪視にねらわれていると思う人はいないであろうが、過度な装いはともかくも控える理由にはなっている。

吉凶という考え方もある。たとえば家から出て初めて出会ったもので縁起の良し悪しを判断する。バルボザはつぎのように書いている（大航海時代叢書V, p. 533）。「ナイレ（ナイル）はみなたいへん立派な戦士であるが、幽霊を信じている。また吉日と凶日を持っている。凶日には何事も始めないし、何もしない。かれらはまた前兆を信じ、もしかれらが何かをしようとしていた時に猫が前を横切ると、それを止めてしまう。もしかれらが何か取引をするために家を出ようとした時に、鳥が木の枝を運んでいるのを見たら、また家に入ってしまう。」この吉凶のリストは現在でもたくさん追加することができる。たとえば縁起の良いのは2人のブラーマン、死人、牛（とくに後ろ向きの牝牛は良い）、魚、縁起の悪いのは1人

のブラーマン、未亡人、沐浴に行く人、使った斧を持つ人、花火を持つ人などである。後者の場合には家にもどってパーン（ピーテル・チューイング）をかんでふたたび外出する。同じように曜日も良い日悪い日というのがある。たとえば衣服は月曜、水曜、金曜が買うのに良い日で、火曜と土曜とくに土曜は買うのに悪い日という。新調した服をおろすときも同じ曜日があてはまる。散髪は金曜、とくに生まれ月の金曜が良い。オイルバースは男が月曜、水曜、土曜が良く、女は火曜、金曜、日曜が良いという。特定のものや曜日が良いか悪いかはともかく、このような吉凶判断はしばしば行われる。また一日が良い日となるように、朝起きると右手を見る。右手の各指にはガナパティ、シヴァ、ヴィシュヌなど神々がやどっているからである。

ケーララにおいて衣装と装身具は単に寒さ暑さから身体を守ったり、身体を飾ったりするだけでなく、形態や着方に宗教意識や身体観が反映され、贈与や洗濯をとおして社会関係が確認される。ここでは断片的にしか論じることができず、分析も不十分であったが、豊かな意味体系のあることが少しは明らかになったのではないかと思う。

注

1) たとえば以下の文献を参照。

D. M. Schneider & K. Gough (ed.), *Matrilineal Kinship*, 1961. Univ. of California Press.

中根千枝『家族の構造』1970年、東京大学東洋文化研究所

C. J. Fuller, *The Nayars Today*, 1976. Cambridge University Press.

Melinda Moore 'A New Look at the Nayar Taravad,' *Man* 20-3, 1985.

高橋 貴「ナイルの結婚と相続」リトルワールド研究報告10号、1989年

2) インドにはナクシャートラム（星日）という、中国の二十八宿にあたるものがある。誕生日はマラーラム月12か月と27のナクシャートラムの組み合わせで決まる。したがって28日目というのはナクシャートラムが一巡する日ということになる。この日、新生児は初めてバナナ粥を食べる。これは未熟バナナを乾燥させて、粉にしたものをミルクとともに粥状に煮たもので、6か月目までの新生児の主要な食べ物であった。

3) 自家製の墨の作り方は、古い布きれをよじってゴマ油に浸し、火をつける。これをつぼの底にあて、ついた煤をとる。この煤にゴマ油かギー（バターオイル）を混ぜて練り、ペースト状にしたものである。

4) ケーララ中部に住む3つのブラーマンの一つ。ナンブーディリは一番古く、後にカルナータカ州からエンブランダリ、タミール・ナドゥ州からアイエルが移住してきたといわれている。

5) オナムとはマラーラム暦のチンガム月（8～9月）に行われる、ケーララでも最大の祭りの一つ。ボート競争、格闘技、神々の巡行などが数日間にわたって華やかに催される。祭りの期間中、家長はねぎらいの言葉をかけながら家族の一人一人に衣服を2枚贈る習慣になっている。この衣服をオナプダワという。広場などには仮設の小屋ができ、大量の衣服が販売される。今日では現金で渡し、自分の好みで衣服を購入することも一般的になっている。

6) マンナンは石・れんが積み職を職業とするジャーティ。ケーララにはラテライト（紅土）が多く、

一部溶岩のように固くなっている。これを斧で四角形に切り出し、家の壁や井戸枠などにする。その妻マナティは産婆の役割をする。

- 7) イナガンは同じナイルではあるが、当事者のリネジ（血縁集団）とは異なるリネジの男性成員の中から儀礼に精通している人が選ばれる。結婚式でホーマなど重要な儀礼を指図し、葬式でも死霊プレタが祖霊ピトゥルに昇華するときの儀礼を指図するなど儀礼上きわめて重要な人物である。
- 8) ナンブーディリ・ブラーマンの場合、小便のあと身を浄める方法は、土を局部につけ、水で洗うことを7回繰り返す。大便の後は同じことを12回繰り返す。マヌ法典には「清浄を望む者は小便のときは男根に対して一度、大便のときは尻に対して三度、片手（右手）に十度、両手に七度土を用いるべし（5・136）」とある。
- 9) カースト制度は明らかな身分差別であるため公的に廃止されたが、各ジャーティは世襲的な職業をもち、その製品やサービスを互いに提供しながら地域社会を形成してきた。世襲的な職業は職業選択の自由を規制するものではあったが、他方で職業教育を無償で提供した。つまり子どもは日常生活の中で父の仕事を見ながら技術や知識を習得した。何代にもわたって受け継がれることによって技術は洗練され、合理化される。他方、日当50～100ルピーの換算で製品の値段を決めればよく、結果として安価で質の良い製品が提供されてきた。これについては、後日改めて論じる予定である。

参考文献

- Ayyar, P.V. Jagadisa
1989 *South Indian Customs*, New Delhi: Asian Educational Services.
- Dange, Sadashiv Ambadas
1986 *Encyclopedia of Puranic Beliefs and Practices*, New Delhi: Navrang.
- Fuller, C.J.
1992 *The Camphor Flame*, Princeton: Princeton University Press.
- Gillow, John & Barnard Nicholas
1991 *Traditional Indian Textiles*, London: Thames and Hudson.
- Kumar, S. & Gajrani, S. (ed.)
1998 *Culture, Religion and Traditions in India*, Faridabad: OM Publications.
- Lynton, Linda
1995 *The Sari*, London: Thames and Hudson.
- マリー・ルイーゼ＝ナブホルツ＝カルタショフ
1986 『インドの伝統染織』紫紅社
- Menon, A. Sreedhara
1979 *Social and Cultural History of India Kerala*, New Delhi: Sterling Publishers Pvt Ltd.
- トメ・ピレス
1966 『東方諸国記』大航海時代叢書V 岩波書店
- リンスホーテン
1968 『東方案内記』大航海時代叢書VIII 岩波書店